



私の写真館

My Photo Studio

アルバムの中に 205

政策研究大学院大学特任教授

橋本 久義



▲都立戸山高校時代。当時は左翼少年だった。この写真は「自主授業をさせる」と学校に申し入れているところ

◀昭和40年、大学1年の時、大工仕事の好きな私は、成沢翠映画伯に依頼されて延べ面積30坪のアトリエを建てた

▶小学校3年生。兄(当時大学1年)がラジオの部品をくれたのがきっかけとなり、ラジオをバラしては組み立てることを飽きずに繰り返した

▼昭和34年5月、14歳になってすぐにバイクの免許を取った。ペビーライラック号を買って、エンジンをバラしては組み立てることを繰り返した。これ以降、私の足は単車となった



ラジオ、バイク、大工、留年

機械をバラしては組み立てることが小さな頃から好きだった。最初はラジオ、十四歳で免許を取ってからはバイクの改造に明け暮れた。ものは八千円で購入した中古のペビーライラック。改造を重ね、スピードがアップしたものの、燃費がよくなったのだと喜んでいたら、それと並行して夢中になったのが大工仕事だ。家には道具一式が揃っていた。家こそ建てなかったが、たいいていの大工仕事はこなせるようになっていた。

大学に入ると、大学紛争が始まり休講が多くなった。そこでライトバンを手に入れ、大工道具一式を積んで便利屋をやるようになった。自慢ではないが、大工仕事のほかに電気、機械関係の修理もできる。商売は大繁盛だ。国家公務員の初任給が三万円弱という時代に十万円程度を稼いでいた。

しかし好事魔多し。商売に夢中にな

なりすぎてドイツ語を落としてしまい、教養課程を一年余分にやるはめとなってしまったのだ。ただ、その余分な一年が幸いした。家を丸ごと建てるという経験ができたのである。成沢翠映画伯のアトリエだ。鉄筋コンクリート造り、建坪三十坪の本格建築であった。

留年にはもう一つ余録があった。大学四年になったおき、お茶の水女子大学を卒業したばかりの女性が実験助手として私の前に現れたのである。もし、留年していなければ、この麗しき女性、つまり女房となった純子と会うことはなかったはずだ。

私の写真館
My Photo Studio

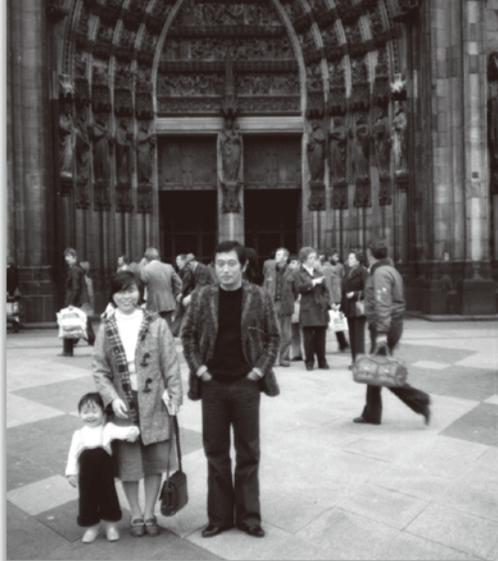


私の写真館

My Photo Studio



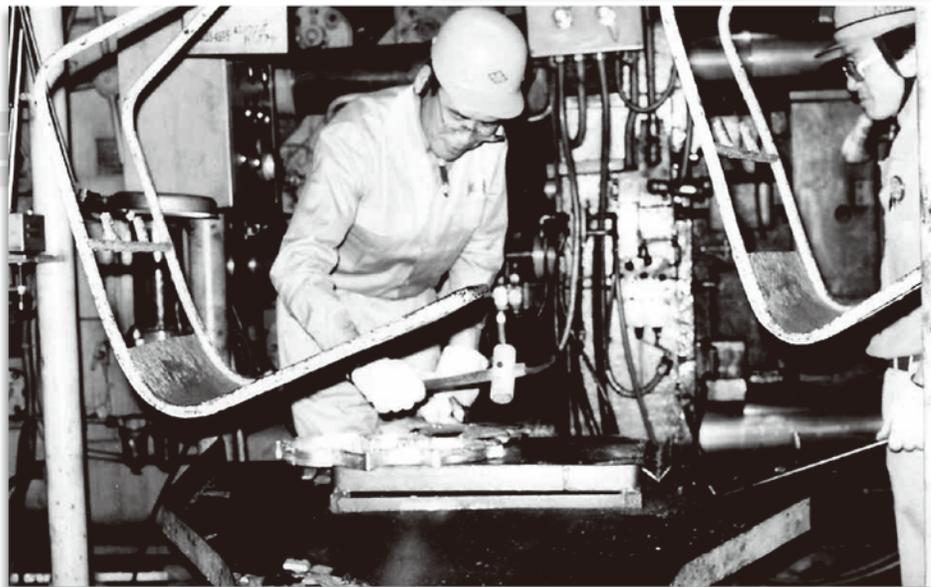
▶昭和53年9月から3年間、西ドイツのデュッセルドルフにJETRO調査員として駐在した。写真は55年に調査にきた仲井真弘多氏(現沖縄県知事)をケルンの大聖堂に案内したときのもの



▶昭和57年、中小企業庁に出身したおり、中小企業同士の異業種交流会を始めた。また個人主催のQA会も始め、超能力に関心のあった私は、メンバーとともに恐山を訪れイタコに降霊をやってもらった



▼昭和62年、通産省鑄造品課長となり現場を知るために古河鑄造で働いた



▲昭和45年6月6日、戸山高校同窓会館で同い年の純子と結婚した。会費制ですべて手作りの式であったため、おつりがきた

▼昭和49年、埼玉県川口市の3DKの分譲住宅に当選。何も置いてない部屋を私は体育室と呼んだ



▼結婚後、目黒区の木造アパート1DKで暮らした





▲「100キロ圏内はバイクで」が私の流儀。
平成16年4月、明治通りをバイクで走行中に
転倒、その瞬間を通行人が撮ってくれた

はしもと・ひさよし 昭和20(1945)年福
井県生まれ。東京大学工学部精密機械工学科
卒業後、通産省入省。機械情報産業局、鋳造
品課長、中小企業技術課長、立地指導課長、総
括研究開発官等を歴任。平成6年8月、埼玉大
学教授(政策科学研究科)に就任。平成9年10
月、政策研究大学院大学教授となる。通産省時
代から「現場に近い」ところで行政を・学問
を「をモットーに第一次円高以来20年間で
3000以上の工場を訪問。著書に「町工場の
底力」「町工場が減れば日本は減じる」「中小
企業が滅びれば日本経済も滅びる」など。

▶平成17年、金属深絞り加工の世界的職人
であり町工場の魔術師と呼ばれる岡野雅
行さんとともに



▼平成6年に埼玉大学教授となり、9年から
政策研究大学院大学教授を務めた。毎年、
大晦日には学生を自宅に招き、一緒に初詣
をすることにしていた



神様のような 暮らしと善行

昭和六十二年六月十五日、通産省
鑄造品課長の辞令を受けた私は
「現場に近い」ところで行政を」とい
うモットーに従い、毎週末曜日を工
場見学の日に決めた。手始めは
キューポラのある街・埼玉県川口市
の鑄物工場である。同時に業界の会
合に出席するときは自分から挨拶
をし、最後まで付き合うという原則
を自分に課した。会合が二次会、三
次会、四次会と続くのはざらである
が、体質的に酒を一滴も飲めないとい
うことが幸いしたというべきか。
こうして通産省時代は年平均で
二百五十五カ所、大学に転じてから
は年に百カ所、気付いてみればこれ
までに三千二百五十カ所以上の町
工場を訪問してきた。
その現場で目にしたのは、
①良い物を作って世界の発展に貢
献しているが、決して不当に儲け
ようとはしない。
②代金の多寡を忘れて顧客のため
に頑張る。
③自分は喰うや食わずの暮らしを
しながら、機械と工具には身分不
相応なほどの金をかけ、手入れを
怠らない。
④寝ても覚めても顧客のために、新
しいやり方安いやり方、便利なや
り方を考えている。――
という経営者と従業員の姿であった。
なんだか昔読んだ本によく似た
暮らしをしている人の話が載って
いたなと思ったらキリスト様だっ
た。「神様のような暮らしと善行
じゃないか」。そんな正しい行い
を続けている人間が、不幸になるは
ずがないと私は思いたい。

私の写真館 My Photo Studio



構成 / 桑原 聡
レイアウト / 株式会社オーバル